H-3　ペルシア語の焦点構文におけるコピュラの生起制限*

野元　裕樹、大久保　弥（東京外国語大学）
nomoto@tufs.ac.jp, okubo.wataru.m0@tufs.ac.jp

1　はじめに

ペルシア語の伝統的な文法では、直説法現在時制のコピュラには、表1のように、独立形と非独立形の 2 種類の形式が認められる[1]。これら二形式は、非独立形が口語で用いられやすいことを除けば、(1) に示すように、交換可能だとされる（Lambton 1971:12–13; Windfuhr 1979:97–99; Mahootian 2002:228–231; Windfuhr and Perry 2009:450–451; Yousef 2018:183–186 など)[2]。さらに、非独立形は接語であるとされる。3 人称単数形の非独立形には他に =ast という形式も存在するが、この形式は独立形の hast のように振舞うこともあり、分類が難しい。そのため、本稿では詳細を論じない。

表 1: 直説法現在時制のコピュラ：伝統的な記述

	1SG	2SG	3SG	1PL	2PL	3PL
独立形	*hastam*	*hasti*	*hast*	*hastim*	*hastin*	*hastan*
非独立形	*=am*	*=i*	*=e*	*=im*	*=in*	*=an*

(1)　a.　man dānešju **hastam**.
　　1SG　student　COP
　　「私は学生である。」

　　b.　man dānešju=**am**.
　　1SG　student=COP
　　「私は学生である。」

本稿では、(2) のように、累加を示す ham「も」のような明示的な接語形式の標識を伴う焦点構文では独立形のみが可能であることを指摘する。さらに、ゼロコピュラを導入してコピュラ体系を捉え直すことにより、焦点構文における生起制限が原理的に説明できることを示す。

(2)　a.　man dānešju=*ham* **hastam**.
　　1SG　student= も　COP
　　「私は学生でもある。」

　　b.　* man dānešju=*ham*=**am**.
　　1SG　student= も =COP

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、非独立形コピュラが生起できない例をより詳細に論じる。第3節では、表1の記述に代わる新たなコピュラ体系の記述を提案する。第4節では、新たなコピュラ体系を利用して、(2) に見られる生起制限を説明する。第5節は結論である。

*本研究は JSPS 科研費 26770135 の助成を受けた。また、本研究を行うにあたって、吉枝聡子先生にご指導をいただいた。ここに感謝の意を記したい。

[1]ペルシア語は、書き言葉と話し言葉の使い分けが顕著であり、ダイグロシアの状態にある。例えば、表1の hastin/=in と hastan/=an は、書き言葉では hastid/=id と hastand/=and となる。本稿では、テヘラン方言の話し言葉を対象とする。

[2]表1の形式は、budan の活用形である。budan には他に存在動詞の用法 (ia) と完了標識の用法 (ib) がある。前者は独立形のみ、後者は非独立形のみが可能である。これらの用法はコピュラと区別する必要がある。

(i)　a.　dar ān　otāq　se　tā　sandali {hast/*=e}.
　　in　that room three CLF chair　EXIST
　　「その部屋には椅子が 3 つある。」

　　b.　in　film=ro　dide {*hastam/=am}.
　　this movie=ACC seen　PRF
　　「私はこの映画を見たことがある。」

2　焦点構文における非独立形の生起制限

非独立形の生起制限は、(2) のように累加の ham を伴う焦点構文のみではなく、明示的な接語形式の焦点標識を伴う構文一般に観察される。(3) は累加の小辞 niz「も」、(4) は対比の小辞 ke「は」を伴う例である。

(3)　a.　u　’alāve bar xānandegi nevisande=*niz* **hast**.
3SG other.than singing　writer= も　COP
「彼（女）は歌手である他に作家でもある。」

b.　* u　’alāve bar xānandegi nevisande=*niz*=**e**.
3SG other.than singing　writer= も =COP

(4)　a.　in　film ’āli　nist　vali xub=*ke*　**hast**.
this film excellent NEG.COP but　good= は COP
「この映画はとても良いわけではないが、良くはある。」

b.　* in　film ’āli　nist　vali xub=*ke*=**e**.
this film excellent NEG.COP but　good= は =COP

非独立形の生起制限は、「A は B である」という単純なコピュラ文だけでなく、同じくコピュラを用いる、吉枝 (2011) が「感情・感覚を表す非人称構文」と呼ぶ構文でも観察される。(5) は、焦点小辞を伴わない非人称構文の例である[3]。独立形も非独立形も文法的である。一方、そこに焦点小辞 ham が加わった (6) では、非独立形が生起できない。

(5)　a.　mā　sard=emun **hast**.
1PL cold=1PL　COP
「私達は寒く感じる。」

b.　mā　sard=emun=**e**.
1PL cold=1PL=COP
「私達は寒く感じる。」

(6)　a.　mā　sard=emun=*ham* **hast**.
1PL cold=1PL= も　COP
「私達は寒くも感じる。」

b.　* mā　sard=emun=*ham*=**e**.
1PL cold=1PL= も =COP

非独立形の生起制限が観察されるのは、明示的な焦点標識を伴う焦点構文に限られる。焦点が明示的な焦点標識なしで表される場合には、非独立形の生起制限は観察されない。(7) は構成素疑問文とそれに対する返答、(8) は分裂文、(9) は焦点となる句が韻律的に卓立する例である。

(7)　a.　u　ki　{**hast/=e**}? — dust-e　man {**hast/=e**}.
3SG who　COP　friend-of 1SG　COP
「あの人は誰ですか？—私の友達です。」

b.　hāl=et　četowr {**hast/=e**}? — xub　{**hastam/=am**}.
state=2SG how　COP　good　COP
「調子はどう？—いいよ。」

(8)　in　šomā {**hastin/=in**} ke　be mā　komak　dād-in
this 2PL　COP　that to　1PL helping gave-2PL
「私達を助けてくれたのはあなただ。」

[3]感情・感覚を表す非人称構文では、刺激を表す句に人称接語が続き、動詞はこの句と一致して 3 人称単数形となる。人称接語は一般に、所有者や項の標示を担う。その形式は、=am (1SG)、=et (2SG)、=eš (3SG)、=emun (1PL)、=etun (2PL)、=ešun (3PL) で、1 人称単数以外は非独立形とは異なる形式である（表1参照）。

(9) doxtar-e QAŠANG {**hast/=e**}.
girl-DEF beautiful COP
「あの女の子は**綺麗**だ。」(Mahootian (2002:115) の例を改変)

3 コピュラ体系の捉え直し

本稿では、ペルシア語のコピュラは一貫してコピュラ語幹と主語との一致を表す人称接辞から成ると主張する。独立形については、伝統的にもそのような記述がされる。例えば、直説法現在時制の場合、コピュラは語幹 hast と人称接辞に分けられる。しかし、非独立形については、それが人称接辞と類似の形式であることは指摘されてきたものの、人称接辞ではなく接語形のコピュラとして分析されてきた。本稿では、音形を伴わない、ゼロコピュラ（Ø）を仮定し、非独立形もコピュラ語幹—具体的には Ø—と人称接辞から成ると提案する。

ゼロコピュラを仮定する場合、表1の伝統的なコピュラ体系の記述は表2のように捉え直される。3 人称単数を除けば、人称接辞は独立形と非独立形で共通である。3 人称単数の人称接辞はゼロであると考えられる。だとすると、3 人称単数の非独立形はコピュラも人称接辞もゼロの全くの無形（Ø-Ø）になるはずである。だが、コピュラの存在を示すためか、実際には e という形式が用いられる。この e は、コピュラの接続法 3 人称単数形（bāš-**e**）、動詞の直説法現在時制 3 人称単数形（mi-kon-**e**「する」）に現れる人称接辞 -e に由来すると思われる[4]。

表 2: 直説法現在時制のコピュラ：本稿の提案記述

	1SG	2SG	3SG	1PL	2PL	3PL
独立形	*hast-am*	*hast-i*	*hast-Ø*	*hast-im*	*hast-in*	*hast-an*
非独立形	*Ø-am*	*Ø-i*	*Ø-e*	*Ø-im*	*Ø-in*	*Ø-an*

伝統的記述と本稿の提案記述には、2 つの主要な違いがある。第一に、伝統的記述では非独立形は内部構造を持たない特殊な形式であるのに対し、本稿の提案記述では独立形と同種の内部構造を持つ。それと関連し、第二に、伝統的記述では非独立形の顕在的部分は接語であるのに対し、本稿の提案記述では接辞である。非独立形は、(10) のように、さまざまな統語範疇と結び付く。

(10) a. un [$_{DP}$ pedar=am]=**e**.[5]
that father=1SG=COP
「あれは私の父です。」(cf. That **is** [$_{DP}$ my father].)

b. in āhang [$_{AP}$ qašang]=**e**.
this music beautiful=COP
「この曲は美しい。」(cf. This song **is** [$_{AP}$ beautiful].)

c. in [$_{PP}$ barā-ye ki]=**e**?
this for who=COP
「これは誰のためですか？」(cf. Who **is** this [$_{PP}$ for ~~who~~]?)

[4]ast（第1節冒頭参照）> e という通時的な変化があったという説もある (Lazard 1992:28, 31, 138; Windfuhr and Perry 2009:451)。

[5]非独立形コピュラは、伝統的記述に従って表記してある。

しかし、括弧内に示した英訳から分かるように、コピュラも一般にこの特徴を持つ。従って、このことから非独立形の顕在的部分が接語であるとは結論できない。

4　分析

本節では、前節までの記述に基づき、焦点構文における非独立形コピュラの生起制限を分析する。例文 (2) を、前節で提案した新たなコピュラ体系を反映させて、(11) として再掲する。

(11)　a.　man dānešju=*ham* **hast-am**.
　　1SG student= も　COP-1SG
　　「私は学生でもある。」

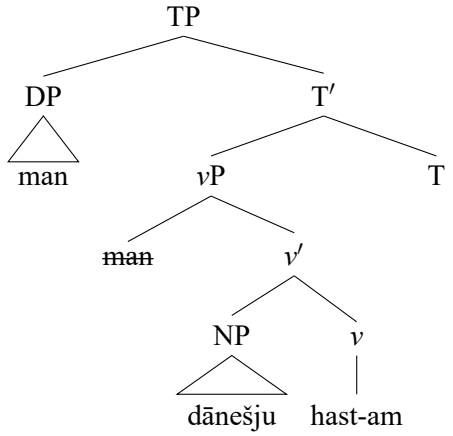
　　b.　* man dānešju=*ham* **Ø-am**.
　　1SG student= も　COP-1SG

4.1　コピュラ文

コピュラは、軽動詞 *v* であるとする。人称接辞はコピュラと一体となって統語構造に導入される[6]。独立形コピュラを伴う (12a) [= (1a)] の構造は (12b) のようになる。

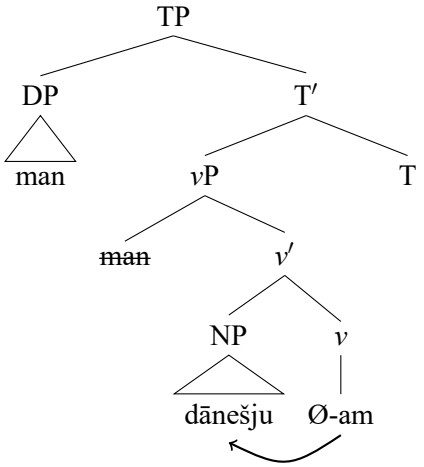
(12)　a.　man dānešju **hast-am**.
　　1SG student COP
　　「私は学生である。」

b.



(13)　a.　man dānešju **Ø-am**.
　　1SG student COP
　　「私は学生である。」

b.



人称接辞は、その拘束的性質のために、音形を持つホストを必要とする。独立形ではコピュラ hast がホストとなる。一方、非独立形ではコピュラは音形を持たないため、述語がホストとなる。(13a) [= (1b)] では、述語名詞 dānešju「学生」がホストとなる。ホストと人称接辞の一体化は、(13b) の樹形図では矢印で示してある。一体化は音韻に関わるため、排出後に起こると考えられる。

4.2　焦点構文

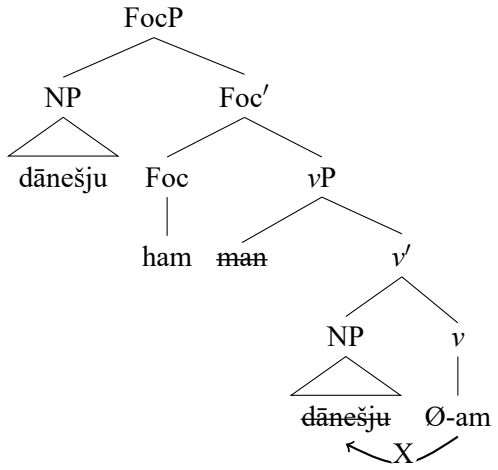
ham などの明示的な標識を伴う焦点構文では、TP と *v*P の上位に焦点小辞が主要部である焦点句（FocP）があるとする分析を採用する (cf. Karvovskaya 2013)。焦点となる名詞句は、(14) に示したように、FocP 指定部に移動する。

(14)　[$_{TP}$ man [$_{FocP}$ [$_{NP}$ dānešju] [$_{Foc'}$ ham [$_{vP}$ [$_{v'}$ ~~dānešju~~] [$_{v}$ hast-am]]]]]

[6]人称接辞は T にあり、接辞の繰り下げ（affix hopping）が起こっている可能性もある。Toosarvandani (2009) は、複雑述語を伴う文における省略のパターンに基づき、ペルシア語では *v* から T への移動はないと主張する。人称接辞の併合位置は、本稿の議論に影響を与えない。

(14) のようにコピュラが hast の場合、人称接辞 -am は hast と一体化し、文法的な文となる。一方、ゼロコピュラが用いられる場合、人称接辞は (13b) に示したように、*v*P 補部の述語名詞と一体化せねばならない。しかし、ham 焦点構文では当該の名詞が焦点移動するため、*v*P 補部に音形を持つ要素が存在しない (15)。よって、ゼロコピュラの文は非文となり、(11) に示した文法性の差が生じる。

(15)



この分析は、英語の動詞句前置構文の説明と原理的には同じであり、通言語的にも妥当であると言える。(16) では、動詞が前置されたため、過去時制接辞 -ed はホストを失い、非文法的になる。ただし、do 支持が起これば、do が -ed のホストとなるため、文法的になる。

(16) John promised to read the book, and [$_{VP}$ read the book] he {did/*-ed} ~~read the book~~.

4.3 他の分析による説明の試み

4.3.1 接語間の相対的順序

一般に複数の接語が連接する場合、その相対的順序には何らかの制限があるのが普通である。もし非独立形コピュラが接語で、焦点小辞よりも前に来なければならないという制約（コピュラ＞焦点）があれば、非独立形の焦点構文における生起制限が説明できる。

しかし、非独立形コピュラは、そこに強勢を置くことができないため、接語である可能性は低い。また、(17) のように、「コピュラ＞焦点」の順に順序を変更しても、文法的にはならない。

(17) * unā dānešju=**an**=*am*.[7]
3PL student=COP= も

4.3.2 選択制限

焦点小辞が焦点となる要素に付加するとし（例：[[dānešju] =ham]）、非独立形が焦点小辞を含まない句のみを選択するとすれば、非独立形の焦点構文における生起制限が説明できる。しかし、独立形にはそのような選択制限は存在しないので、この分析はアドホックと言わざるを得ない。

4.3.3 縮約

非独立形を独立形の縮約形とみなせば、焦点構文では焦点小辞が介在するために縮約ができなくなるとし、非独立形の焦点構文における生起制限を説明できる。

[7]焦点小辞 ham は、口語では h が落ちて am となることがある。

(18) a. dānešju + hastam → dānešju=am （非焦点構文）

b. * dānešju + **ham** + hastam → dānešju=ham=am （焦点構文）

しかし、すべての縮約の結果で、独立形にある hast の部分の痕跡が見られない（表1参照）。また、3 人称単数の e は hast からの縮約により生じたとは考えにくい。

口語において、(19) のように、語頭の h(a) が落ちる現象がある。これこそが、本当のコピュラの縮約であろう。

(19) a. četowr **h**ast-i? → četowr=ast-i? [how COP-2SG]「君はどう？」

b. xub **h**ast-in? → xub=ast-in? [good COP-2PL]「あなた（達）は元気ですか？」

c. zibā **ha**st-and → zibā=st-and [beautiful COP-3PL]「それらは美しい」

5 結論

本稿では、従来のペルシア語文法で交換可能とされてきた直説法現在時制のコピュラの独立形と非独立形について、後者が焦点構文では生起できないことを指摘した。また、ゼロコピュラを導入してコピュラ体系を捉え直すことを提案した。さらに、新たなコピュラ体系の記述のもとでは、非独立形の焦点構文における生起制限を人称接辞の拘束性から導くことができることを示した。

本稿で提案した分析は、以下の 3 点を例証する。[1] 無形の要素の導入により、文法記述がより体系的になることがある。[2] 焦点小辞は単に焦点となる句に付加するものではない。焦点となる句は、焦点構文では非焦点構文とは異なる統語的位置を占める。仮に同じ位置を占めているとしたら、人称接辞は音形を持つホストと一体化でき、非独立形が焦点構文でも文法的になるはずである。[3] 形態素の音形の有無が文法性を決定し得る。コピュラを含む文の文法性は、コピュラが有形か無形か（独立形 vs. 非独立形）、*v*P 補部が有形か無形か（非焦点構文 vs. 焦点構文）により決定される。

最後に、ペルシア語の非独立形コピュラのように、明示的コピュラ要素を欠き、人称の標識がコピュラのように見える現象は pro-copula として知られ、近隣地域の言語で多く報告されている (Stassen 2013)[8]。それらの言語にも、本稿で提案したコピュラ文の分析が適用できる可能性がある。

参考文献

Karvovskaya, Lena. 2013. ‘Also’ in Ishkashimi: Additive particle and sentence connector. *Interdisciplinary Studies on Information Structure* 17:75–97.

Lambton, A.K.S. 1971. *Persian grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lazard, Gilbert. 1992. *A grammar of contemporary Persian*. Cosa Mesa, CA: Mazda Publishers.

Mahootian, Shahrzad. 2002. *Persian*. London: Routledge.

Stassen, Leon. 2013. Zero copula for predicate nominals. In *The world atlas of language structures online*, ed. Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.

Toosarvandani, Maziar. 2009. Ellipsis in Farsi complex predicates. *Syntax* 12:60–92.

Windfuhr, Gernot, and John R. Perry. 2009. Persian and Tajik. In *The Iranian languages*, ed. Gernot Windfuhr, 416–544. London: Routledge.

Windfuhr, Gernot L. 1979. *Persian grammar: History and state of its study*. The Hague: Mouton.

Yousef, Saeed. 2018. *Persian: A comprehensive grammar*. Oxford: Routledge.

吉枝聡子. 2011. 『ペルシア語文法ハンドブック』白水社.

[8]ただし、Stassen (2013) は「健　彼／あれ　学生」のような文での代名詞・指示詞も同じ pro-copula の現象に含める。